



100万人の市民現場見学会 親しみの持てる産業に向けての取り組み

社団法人日本土木工業協会



社団法人日本土木工業協会（土工協）が平成14年11月から全国の土木工事現場において一般市民を対象として開催している「100万人の市民現場見学会」は、開始からちょうど3年が経過した平成17年10月末、参加者が100万人を突破した。それを受けて現在は、第2ステージ「100万人の市民現場見学会——暮らしを守る国づくり」として引き続き積極的に展開している。

1. 「100万人の市民現場見学会」のねらい

土工協が、「100万人の市民現場見学会」をスタートさせるきっかけとなったのは、依然として厳しさを増す社会資本整備や建設業に対する批判や指摘にどのように対処していくべきかという検討からである。土工協広報委員会では、従来から建設業の役割や社会資本整備の必要性に対する社会的理解を促進するため、幅広い広報活動を展開してきた。しかしながら一向に収まらない社会資本整備や建設業に対する根強い批判を打破するため、建設業の実情を訴え理解を求めるより有効な広報活動を探ってさまざまな検討が行われた。その結果導き出されたのが、地道で手間のかかる手法ではあるが、全国に多数ある建設工事現場に直接市民を招き、社会資本整備や建設業の生の姿を体験していただくという現場見学会である。

広報にはさまざまな手法がある。現場見学会は、TVや新聞、雑誌の広告のように大多数の人々の目に触れることはないが、実際に工事現場に自分の足を踏み入れ、その目でその耳で確かめる体験を通して、社会資本整備のあり方や建設業について考えていただくきっかけとなり、大きな意味を持つに違いない。一度にお招きする人数は限られてはいるが、全国の工事現場で継続して行うことによって徐々にその効果が浸透していくのではないだろうか。結局はそれが社会的理解促進の早道であると考える。

こうして、できるだけ多くの市民に参加していただきたいという趣旨から、「100万人の市民現場見学会」と名付けられ、会員会社、土工協本・支部一体となって全国で大々的に現場見学会を展開している。

「100万人の市民現場見学会」を開催するに際して特に留意していることは、見学者に単に現場内を案内するだけでなく、見学後には必ず意見交換の場を設けることである。そこでは工事概要や建設技術の説明だけでなく、その施設はどのような目的でつくられ、その施設が完成した暁にはどのような効果が期待できるのかという点に重点をおいて説明している。さらに社会資本整備や建設業に対する疑問等について率直な意見を求め、それに対して土工協幹部や現場担当者が丁寧に回答し、相互理解の促進に努めている。

2. 第2ステージのテーマは「防災」

平成17年12月からスタートした第2ステージは、昨今、国の内外で自然災害が多発している状況を踏まえ、サブタイトルを『暮らしを守る国づくり』に改め、「防災」をテーマに見学会を展開している。

建設事業の役割の一つとして、暮らしを快適にし、安全、安心な地域づくり、社会づくりが挙げられる。「100万人の市民現場見学会」では、現場を見ていただくとともに、「暮らしを守る国づくり」という視点から、安全で安心な地域づくり、社会づくりに貢献している建設事業の理解を深めていただきたいと考えている。

特に近年、わが国では地震、台風、豪雨や豪雪などがもたらす災害が頻発しており、海外でも大地震、大津波による大規模な災害が発生している。地球温暖化による異常気象の影響が懸念される中、災害に対する国民の関心も高まっていると思われる。そして、災害に強い地域づくり、社会づくりには建設事業の推進と同時に、一人ひとりの防災に対する常日頃からの心構えが重要であることから、現場見学会の場を利用して、防災に対する意識向上を図っていただくことを目的としている。

第2ステージの具体的手法としては、バスでの移動時間、食事時間、集合までや現場出発までの待機時間等の空き時間などを有効に活用して防災DVDをご覧いただいている。

この防災DVDは、土木学会が制作した「必須!! 防災知識」で、日本人が最低限知っておくべき防災知識を身につけてもらうことを目的として、子供から大人まで、どの階層にも理解しやすいよう

に、記録映像、写真、イラストなどを盛り込んでビジュアルにつくられている。構成は、日本の自然の特色、自然災害の実態などを解説した「基本編」をはじめ、「地震・津波編」「台風・豪雨編（洪水・高潮・津波）」「土砂災害編」および「火山編」からなっている。視聴後には意見交換等を通して、土木施設が安全、安心の国づくりに役立っていることを分かりやすく説明することとしている。

3. 現場見学会はブーム

最近、工事現場や工場等、一般の人が普段目にするのできない場所を見学する催し等が人気を呼んでいる。大規模な地下構造物の工事現場の様子がテレビのニュースやバラエティ番組で放映されたり、雑誌のグラビアに掲載されることも多い。本協会にも旅行代理店から土木工事現場や近代遺産を巡るツアーを企画したいので工事現場を紹介してほしいとの依頼があったほどである。これに関しては残念ながら公益法人という性格上協力はできなかったが、JTBパブリッシングから大人の遠足シリーズの一環として『近代土木遺産ウォーク 関西』が出版されるなど、工事現場や土木遺産を訪ねたいという思いは強いものがあるのだろう。

建設業は従来社会資本整備に貢献し、暮らしと密接にかかわっているにもかかわらず、国民から親しまれている産業とは言い難い。むしろ批判にさらされネガティブな印象を抱かれている。その中には明らかに誤解に基づくものも少なからずあると思われるが、建設業界はそれらに対して反論・説明することを苦手としてきた。いわゆる「サイレントな業界」であったことが、国民の目には不

「100万人の市民現場見学会」実施状況						平成18年12月	
会員会社主催 (A)		土工協本部主催 (B)		土工協支部主催 (C)		合計	
回数 (回)	参加人数 (人)	回数 (回)	参加人数 (人)	回数 (回)	参加人数 (人)	回数 (回)	参加人数 (人)
28,796	1,158,356	172	19,940	599	102,025	29,567	1,280,321



西粟倉トンネル現場見学会



大夕張トンネル現場見学会



大橋ジャンクション現場見学会



荒川インターチェンジ現場見学会

透明に映り、不信感を一層募らせる面があったことも否めない。いかに情報発信を多くしていくかがこれからの課題であるが、このような意味でも現場見学会を有効に活用していきたいと考えている。

4. 建設マンの熱き思い

「100万人の市民現場見学会」では、参加者の感想や要望を吸収し、今後の開催の参考にするため、現場見学会の最後に参加アンケートを実施してきた。それによると、参加者の9割近い方が見学会は初体験であり、「当初思っていた建設現場のイメージが一新された」「また現場見学会に参加したい」とおおむね好意的な回答を寄せている。

また、インターネット上で「社会科見学に行こう」を結成し、幅広く活動を展開する小島健一氏は、首都高速中央環状新宿線代々木シールドの工事現場の見学会に参加した感想を聞かれて次のように答えている。「現場見学会で一番面白いところは、現場の方々が工事の内容や技術などを熱く

語ってくれることです。(中略)質問すれば気持ちよく答えてくれるのが、聞いていて嬉しいのです」(『CE建設業界』2006年6月号)。現場見学会に参加する人の動機はさまざまであろうが、工事現場で

働く人や建設業の幹部と忌憚なくいろいろな意見交換ができるのも大きな魅力となっている。そのことが建設業に対する印象を大きく変える糸口になるのではないだろうか。今後とも参加者の思い出に残るような工夫を盛り込むように努めながら、「100万人の市民現場見学会」を継続していきたいと考えている。

土工協ホームページアドレス

<http://www.dokokyo.or.jp/genba/index.html>